長野県史　通史編　第六巻　近世三

目　次

口絵
緒言
例言
第一章　飢饉体験と村の変動……一
第一節　天明の飢饉と騒動……二
一　天明の飢饉……二
浅間大焼け　大焼けの被害　天明三年の飢饉　米価の騰貴と窮民
天明六年の飢饉　農民と領主の対応策
二　天明の騒動……三
天明の上信騒動　松代藩山中騒動　飯田の米騒動
第二節　貧富の差と凶荒対策……三

一　貧富の差の進行……三二
豪農と貧農　欠け落ちと潰れ百姓
二　飢饉体験……四三
天明飢饉記の成立　村法・家訓と飢饉体験
三　凶荒・救貧対策……五一
幕藩領主の救荒対策　松代藩の難渋村御手入れ制　村の救恤策
困窮者救助無尽と貸しつけ講　村金貸しつけ制
第三節　離農の動き……六九
一　人口の変化……六九
信濃の人口動態　家族構成の変化　通婚圏の変化
二　農業経営からの離脱……七八
農業経営と諸かせぎ　借地・借家人
三　奉公人と日雇い……八七
出奉公人と抱え奉公人　奉公人の実態　日雇い・賃かせぎ人　飯盛女
第四節　文政・天保の飢饉と善光寺地震……一〇二
一　文政の凶作……一〇二
文政八年の凶作　訴願と教訓

二　天保の飢饉……一〇八
天保四年の凶作　天保七、八年の飢饉　穀改めと穀留め　施米・施粥
囲い穀の放出と買い入れ米　訴願と騒動
三　善光寺地震……一二七
地震と災害　善光寺町の震災　地すべりと犀川湛水の決壊
諸藩の対応と地震情報

第二章　村方騒動と百姓一揆……一三九

第一節　村方騒動・小作騒動と領政批判……一四〇
一　村方騒動の激化……一四〇
名主入札をめぐって　村役人と小前騒動　多様化する村方騒動
二　小作騒動の拡大……一四九
小作騒動の動き　小作騒動と村方騒動
三　町方騒動と領政批判……一五九
町の変化と騒動　岩村田領民の治政批判　阿島騒動

第二節　百姓一揆の高まり……一七二
一　訴願運動の激化……一七二

一揆の性格変化　『出入軍方記』は語る　入奈良本の庄屋出入り
百姓一揆の特異地域
二　冥加・運上新法と一揆……一七八
金遣いの経済へ　飯田藩の紙問屋騒動　高遠藩わらじ・木綿騒動
御用金をめぐる一揆
三　浅野騒動と沓野騒動……一九〇
飯山藩の浅野騒動　複雑な背景　佐久間象山の開発策と沓野騒動
沓野騒動の経過
四　赤蓑騒動……二〇六
赤蓑騒動の打ちこわし　世直し一揆の先駆
第三章　養蚕業の発達と商品流通……二二三
第一節　養蚕業と商業的農業の発達……二二四
一　桑畑の拡大……二二四
養蚕奨励と藩営桑園　桑畑開発と出入り　桑苗育成と桑葉売買
二　養蚕業の特色……二二八
養蚕経営　夏蚕・秋蚕の導入　養蚕技術と設備　蚕種の生産と流通
繭の使途と販路　糸市出入りと糸会所

三　商業的農業の発達……二五二
木綿栽培の盛行　煙草の生産と流通　米の商品化と稲作の進歩
商品作物の多様化と諸業の奨励　金肥の増加と下肥出入り

第二節　民富の形成と殖産……二六六
一　農村手工業の発展……二六六
北信の絞油業　上田紬・上田縞　綿打ちと諏訪小倉　鋳物師　紙漉き業の発展
飯田元結と阿島傘　諏訪の鋸と寒天　石灰焼きと窯業
二　中馬の繁栄と通船……二九九
信州・三州中馬論　中馬の馬宿　各地の中牛馬活動　天竜川通船
千曲川通船　犀川通船
三　民富の形成と投資……三一八
富の偏在と投資　用水と新田の開発　鉱山の開発　温泉かせぎ
砥石・枡・秤の販売　信州蕎麦大坂店　佐久鯉　道・橋の普請

第三節　商圏のひろがり……三五二
一　地域市場の発達……三五二
市と在町紛争　村での諸営業
二　全国市場との結合……三六一
信濃産江戸移出品　江戸売りと旅師　信濃出身江戸商人

第四章　幕藩支配の再編成と村の生活……三七一
第一節　幕政改革と信濃……三七二
一　寛政改革と信濃……三七二
代官と手附の新規登用　貯穀の奨励と組合村の設定
風俗取り締まりと代官の教諭　中之条代官所の公金貸しつけ
二　郡中取締役と組合村……三八五
郡中代と郷宿　組合村と取締役の任命　信濃国悪党取締出役制
三　天保改革と信濃……三九六
天保改革の実施　取り締まり体制の強化
第二節　藩政の改革……四〇五
一　諸藩の財政難対策……四〇五
飯田藩の財政と仕送り人　高遠藩の文政財政改革　高遠藩の天保財政改革
二　諸藩の改革……四一八
松代藩真田幸貫の改革　松本藩の改革　須坂藩の改革
第三節　村の生活の変化……四三〇
一　身分・格式の動揺……四三〇

在・町役人の格式序列争い　抱百姓の自立　百姓身分の変化
「えた」身分の変化　「部落」の役割の増大　「部落」取り締まりの強化
「部落」解放への動き
二　女の生活と家の変化……四五二
宗門改め帳の女たち　女の若年結婚と寡婦　自分を生きる女たち
三　衣食住の向上と新風俗……四六五
衣類の多様化　食生活の向上　住居の改善　風俗の変化
第五章　庶民文化と教育の進展……四八九
第一節　信濃の学芸と小林一茶……四九〇
一　文人結社……四九〇
学芸の隆盛　漢詩文と書　和歌・国学　狂歌　生花・謡曲
二　俳諧の流行と小林一茶……五〇〇
有力俳人の輩出　俳人一茶と信濃の俳人たち
三　武士層の学芸と藩校……五〇九
信濃各藩の藩校と郷学　松代藩文武学校の設立　高遠藩進徴館の設立
藩校の教育　維新期の藩校改革
四　立川流と美術・工芸……五一八

立川流三代　画家の輩出　葛飾北斎の来信　刀工山浦兄弟
五　諸学の発達と蘭学……五三六
農民の経験科学　信州の本草学・博物学　考古学のめばえ　和算のひろがり
在村の蘭学　医師と庶民生活
第二節　庶民信仰……五六三
一　御嶽参りと山岳信仰……五六三
木曽御嶽山信仰の転換　木曽御嶽山信仰の特色　戸隠山と諸山の信仰
修験道と木食
二　野仏と寺社参り……五七九
信濃の石仏　観音と地蔵　庚申と道祖神　寺社参りと札所
三　村祭りと遊芸……五九三
領主の祭礼規制　歌舞伎と人形芝居　さまざまの遊芸　遊び日の増加
第三節　寺子屋の発達と文化伝承……六一一
一　心学講舎……六一一
信州心学の開祖中村習輔　須坂藩の教倫舎　植松自謙と時中舎
心学者の活動と思想
二　寺子屋の教育……六三
寺子屋・私塾の普及　私塾・寺子屋の師匠　教諭所・共立学問所としての寺子屋

寺子の学習課程と往来物
三　若者組……六三七
村の変化と若者組の活躍　若者組の構成と運営　文化の伝承と受容
領主と村の規制
四　庶民世界のひろがり……六四六
私日記の出現　『年代記』の世界　お役所知らざるところ　農事と災害
新知識の名主就任
五　村離れの人生……六五六
他所者入りこみ　無法者　「愛情」と自己主張　無供養の不安と人生
村をこえる世間知　村のきびしさ

第六章　開国と経済・社会の変動……六七三
第一節　黒船来航と藩論・世情……六七四
一　黒船来航と江戸湾警備……六七四
黒船問題と朝幕関係　黒船来航と松代藩　信濃諸藩の対応
江戸湾警備と人夫徴発
二　藩論の動向……六八五
開国諮問への諸藩答申　松代藩論の不統一と象山

三　世情……六八九
さまざまな動き　黒船情報のひろがり
第二節　横浜開港と蚕糸業……六九五
一　開港と交易……六九五
和親条約から通商条約へ　開港後の政局と貿易　飯田地方の横浜生糸商い
諏訪商人の生糸横浜出荷　上田藩産物会所の横浜交易
二　蚕糸業の発達……七二三
座繰り製糸の普及　諏訪製糸業の経営　蚕種業の発展　養蚕業の展開
第三節　物価騰貴と庶民生活……七四三
一　米価と諸物価の高騰……七四三
開港後の階層分化　米価の騰貴と民衆生活　諸物価の高騰と賃金
二　産物会所の再編成と民衆……七五七
松代藩の産物会所　上田藩の産物会所　松本藩の産物役所
豪農商の産物会所構想
第七章　幕末動乱下の信濃……七七五
第一節　民衆思想の成長と平田派国学……七七六

一　南山一揆と世直し思想……七七六
幕末動乱の世へ　南山一揆の展開　上層農と貧農との対抗　世直しの神
二　神道の普及……七八六
神道への改宗の動き　神道信仰のひろがり
三　平田派国学者の活動……七九二
信濃における国学運動の系譜　平田派国学の受容と門人帳　各地の平田派結社
『古史伝』板行と本学霊社　勤王志士の誕生
第二節　和宮と水戸浪士の通行……八一二
一　和宮の東下……八一二
和宮東下問題のおこり　和宮通行と信濃諸藩　和宮通行と農民の負担
二　水戸浪士の通行……八二三
水戸浪士のおこり　和田峠・樋橋合戦　伊那谷通行と国学者
伊那谷通過の波紋
三　街道騒然……八三七
参勤交代緩和と人質帰国助郷　悪徒横行
第三節　軍事改革と農兵……八四二
一　幕藩関係の変化……八四二
信濃諸藩主と幕府　長州征伐と信濃諸藩

二　軍制改革と農兵……八五一
松代藩の軍制改革　上田藩の軍制改革　諸領の改革　幕府の兵賦令
禰津知行所の兵賦　幕府領の兵賦

第四節　京都政界と志士……八六九
一　藩論の動揺と政情……八六九
佐久間象山派と長谷川昭道派　京都政情と諸藩
二　志士の活動……八八一
近藤茂左衛門・山本貞一郎　伊藤軍兵衛　高松平十郎・角田忠行　赤松小三郎
薩邸浪士隊へ参加した人々　伊那谷に潜伏した志士たち

第五節　木曽騒動とお札降り……八九三
一　世直しの動きと木曽騒動……八九三
信濃の世直し状況　飯田・駒場の打ちこわし　村方騒動・小前騒動
木曽騒動の発生　「世ならし」意識　佐久の騒動と上州
二　お札降り……九〇七
お札降り・ええじゃないか　下伊那のお札降り　上伊那の熱狂　諏訪の降札
木曽谷の高揚　松本平と北信への伝播　維新の夜明けへ

付録　所領分布図

度量衡・通貨表
あとがき
社団法人長野県史刊行会役員名簿
執筆者名簿
通史近世担当編纂委員名簿
長野県史編纂関係者名簿
口絵解説
写真・図・表目次